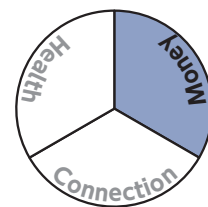


アジア・新興国 ～ベトナム、新型コロナを克服も課題山積～



経済調査部 首席エコノミスト 西濱 徹 (にしはま とおる)

経済活動正常化に加え、米中摩擦の「漁夫の利」も

ここ数年のベトナムは、米中摩擦の「漁夫の利」を得る形で景気が押し上げられたが、年明け以降は新型コロナウイルスの影響で景気に急ブレーキが掛かった。ベトナムはASEAN内では新型コロナウイルスの抑え込みに成功しており、感染発覚を受けて主要都市を対象に都市封鎖に動いたものの、4月末以降は段階的に経済活動の正常化が進められ、7月には80ヶ国を対象に電子ビザの申請を承認した。なお、外国人来訪者は多くの国がビジネス目的に限定しており、ビザ解禁後も低調な推移が続いている。しかし、中国をはじめとする主要国の経済活動再開による世界経済の回復期待を受けた世界貿易の底入れに伴い、ベトナムの財輸出も底入れした。

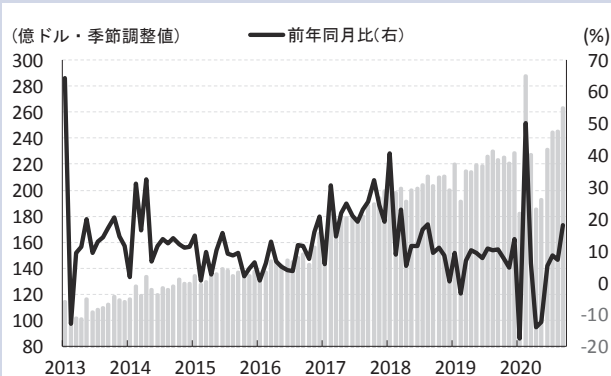
さらに、新型コロナウイルスのパンデミックの背後で米中摩擦は一段と激化しており、ベトナムの輸出にとってはその地の利も追い風となっている。また、経済活動の正常化が進む中、足下のインフレ率は落ち着いた推移が続いており家計消費を下支えしている。そして、アジア域内におけるサプライチェーンの再構築の動きはベトナムへの直接投資を後押ししており、この動きもベトナム景気を下支えている。このように外需の回復をけん引役に、内需にも底打ちの動きが強まっていることを受けて製造業を中心に生産活動が活発化しており、ベトナム経済は勢いを取り戻している。

外需底入れで景気反転も先行きには依然不透明感

年明け以降の実質GDP成長率は前年比ベースで鈍化し、当研究所が試算した季節調整値に基づく前期比年率ベースでは2四半期連続でマイナス成長となるなど景気後退局面入りした。しかし、外需をけん引役に景気は底入れし、7-9月の実質GDP成長率は前年比+2.62%と4四半期ぶりに伸びが反転、前期比年率ベースでも3四半期ぶりのプラス成長となった。分野別ではすべての産業で生産が拡大傾向を強めるなど、幅広い分野で改善が確認された。また、当研究所の試算では7-9月の実質GDPの水準は昨年10-12月をわずかに上回り、新型コロナウイルスによる経済への悪影響を克服したと捉えられる。

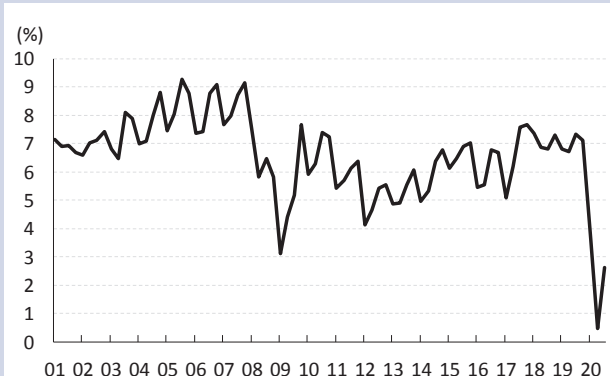
しかし、足下の景気回復は外需がけん引役となるも、先行きには不透明要因が多い。新型コロナウイルスは依然事態収束の見通しが立たず、外国人来訪者の回復が遅れるなど、観光関連産業への悪影響の長期化が懸念される。さらに、9月初めには米政府が為替操作に関する調査を開始しており、仮に為替操作国に認定されれば制裁関税が課されるなど輸出への悪影響は必至である。ベトナムにとっては米中摩擦の「漁夫の利」が景気の押し上げに繋がってきたが、米トランプ政権によりそのとぼっちりを受ける可能性も出ており、先行きの景気回復を巡る不透明要因になることは避けられないであろう。

資料1 輸出額の推移



(出所)CEICより第一生命経済研究所作成、季節調整値は当社試算

資料2 実質GDP成長率(前年比)の推移



(出所)CEICより第一生命経済研究所作成